

企業名： 京セラ

レポート名：統合報告書 2022

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

2021年4月に事業部門を「コアコンポーネント」、「電子部品」、「ソリューション」の3つのセグメントに再編したことに加え、技術や事業間の交流を増やし、全社横断的な組織体系を目指すプロジェクトの始動によって、組織の風通しが大きく改善されたため、京セラは現在、新しい事業進出への環境が整備されている。そのような状況の中、情報・通信、自動車関連、環境・エネルギー市場においては変革に積極的に対応している。具体的には、ドキュメントソリューション事業では、インクジェットプリンターの開発を進めており、エネルギー分野では再生可能エネルギーの領域において拡大の余地があるため、「社会課題の解決に貢献する事業領域」では成長が見込まれる。また、医療・ヘルスケアの分野においても人工関節の再生医療や予防医療の開発に注力しており、さらなる成長が見込まれる。上述した様々な分野で積極的な投資を実施していく模様で、京セラが新規事業への拡大を狙っているという将来の姿は十分理解できる。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

京セラは情報・通信、自動車関連、環境・エネルギー、医療・ヘルスケアの4つの市場を軸にしており、特に情報・通信市場においては、技術力の高さからさらなる小型化、軽量化に成功しており、優位性を確保できているといえる。加えて、京セラが持つ無線技術とJMA社が持つベースバンド技術が融合し、5Gミリ波バックホールシステムが早期の市場投入が可能となった。早期市場投入は市場競争において優位に立たせるであろう。また、積極的なM&Aにより、次世代EV用レーザーモジュールの開発が進んでいるようだ。顔料を用いた環境にやさしいインクジェットシステムの開発は、繊維・アパレル事業において優位にたてるであろう。京セラはアメーバ経営を通じて、事業の円滑化に成功し、従来の情報・通信、自動車関連、環境・エネルギー、医療・ヘルスケア分野の新たな事業においても競争優位性を築いていることが理解できる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

情報・通信や自動車関連の既存の事業においては、長年、競争優位性を築いてきたことから、競争優位性に持続性があると判断可能である。特に、情報・通信に関しては、コロナ禍を通してリモートが進んだこともあり、これから更に社会の需要が増えると予想できることから、競争優位性の持続性は堅固だといえる。しかし、これから進出していくインクジェットシステムや人工関節の再生医療などの新事業に関しては、統合報告書 2022 から競争優位性

に持続性があるかの判断はできない。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

育児・介護・治療との両立支援策が充実していることや女性管理職候補者への教育の実施をしている点で、女性でも活躍できる環境の整備が進んでいると判断できるので、人的資本の価値向上が可能であると思う。また、社内起業家発掘・育成プロジェクトを実施していることや経営者マインド醸成プログラムを実施していることから、向上心のある社員にとっては人的資本の蓄積に最適な環境があるといえる。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

京セラが現在、注力していることに関して、具体的に説明されていたので、重視している部分の理解はしやすかったように思う。図を用いて、わかりやすい部分もあったが、逆に多用しすぎていて、何を伝えたいのかわかりづらい部分もあったように思うので、一つのページ集約する情報を減らすよう、改善するとさらに良い統合報告書となると思う。また、全体的に文字が小さくて、読みにくいところもあったので、簡潔にかける部分はもっとまとめてもよいのではないかなと思った。